

平成 25 年度 私立学校専門研修会・国際教育研究部会 実施報告書

***** 研究のねらい *****

世界基準の教育を目指して～アジアの覇者になれるか～

2010年度から2012年度の3年間にわたり、当部会では、急速に進展するグローバル化の中で世界基準の教育と日本の教育内容(質)について問題提起をしてきました。これを受け、本年度は、世界基準の教育現場を直に視察して、教育の質の向上を図るための研究を行います。

グローバル化とIT革命によって、国境という経済的な壁が消滅し、世界経済全体が一つの経済圏に統合されつつあります。グローバル化の顕著な特徴の一つは、アジアの台頭であり、ASEANの経済統合の動きの中で、その中核都市になるであろうシンガポールの経済成長は凄まじいものがあります。また、同国では、国家戦略として、金融、空港のみならず、教育においてもアジアのハブを目指して活発な動きを見せています。

一方、日本においても、グローバル人材育成に向けた政府及び経済団体の提言を受け、一部日本語によるDPの開発・導入を通じIB認定校の大幅な増加を目指すこととしていますが、既に、シンガポールでは、IB認定校は27校となり、近年、経済発展に呼応するかのよう開校が相次いでいます。そこには、インドネシアやフィリピンなどの近隣諸国からのみならず、日本からの母子留学も増加しています。

これらの現状を踏まえ、今回は、シンガポールの著名なIB認定校(インターナショナルスクール)を視察し、その実態を把握するとともに、シンガポール在留邦人との意見交換において、シンガポールの最新の教育事情や日本の私立学校への要望・提言等を聞くことなどより、グローバル化に対応した世界基準の教育に迫ります。

- ◆ 会 期 ◆ 平成25年9月28日(土)～10月2日(水)
- ◆ 会 場 ◆ マンダリン・オーチャード・シンガポール (Mandarin Orchard Singapore)
333 Orchard Road Singapore 238867
- ◆ 参加人員 ◆ 31名(定員30名)
- ◆ プログラム ◆
 - (概要) ① シンガポールのIB World Schoolの視察
 - ② シンガポールの最新の教育事情の研究
 - ③ シンガポール在留邦人との意見交換

◆ 日程・プログラム ◆

日次	スケジュール
1日目 9/28 (土)	09:00 成田空港第2ターミナル集合 10:55 成田〈東京〉発JL719便 17:15 シンガポール着 *着後、市内レストランにて教育懇談会（空港発レストランへ） 18:30 教育懇談会[18:30～20:00] 【「Jumbo Seafood-The Riverwalk」にて】 *終了後ホテル（マンダリン・オーチャード・シンガポール）へ
2日目 9/29 (日)	09:00 研修会開会式 【ホテル内バンケット「Grange Ballroom」（メインタワー5階）にて】 09:15 オリエンテーション[事前研修] [09:15～11:15] 【ホテル内バンケット「Grange Ballroom」にて】 *ワールドクリエイティブエデュケーショングループCEO・後藤敏夫氏のレクチャー 12:00 塾関係者との意見交換会[12:00～13:00] ※兼昼食 【ホテル内レストラン「Triple Three」（メインタワー5階）にて】 13:30 市内視察(ホテル発)[13:30～17:00] *シンガポール植物園（入場）、マウントフェーバー（下車）、チャイナタウン・マリ ーナ地区（車窓）、マーライオン公園（下車） 17:30 ホテル着後自由研修、各自夕食 【※18:00 オプショナルツアー(ナイトサファリ)】
3日目 9/30 (月)	10:00 (ホテル発 視察校へ) 10:30 IB World School 【Tanglin Trust School(TTS)】 視察[10:30～11:30] 11:35 (視察校発 レストランへ) 11:45 昼食[11:45～12:10] 【「Happy Joy Restaurant」にて】 12:10 (レストラン発 視察校へ) 13:00 IB World School 【United World College of South East Asia(UWCSEA) East Campus】 視察[13:00～14:30] 15:00 (視察校発 ホテルへ) 16:00 ホテル着後自由研修 18:00 企業関係者との意見交換会[18:00～20:00] ※兼夕食 【ホテル内バンケット「Grange Ballroom」にて】
4日目 10/1 (火)	10:00 (ホテル発視察校へ) 10:30 IB World School 【Anglo-Chinese School Independent (ACS)】 視察[10:30～12:00] 12:15 (視察校発 ホテルへ) 12:45 ホテル着後自由研修、各自昼食 【※13:30 オプショナルツアー(セントーサ島またはガーデンズバイザベイ)】 18:30 (ホテル発 空港へ) 21:50 シンガポール発 JL36便
5日目 10/2 (水)	05:45 羽田(東京) 着 *入国手続後、解散

◆ 講師・指導員（順不同） ◆

後藤 敏夫（ワールドクリエイティブエデュケーショングループ CEO）
吉田 晋（富士見丘中学高等学校 理事長・校長）
中川 武夫（淑徳SC中・高等部 顧問）

◆ 専門委員・客員研究員・指導員（順不同） ◆

大羽 克弘（千葉英和高等学校 理事長・校長）
平方 邦行（工学院大学附属中学高等学校 校長）
須藤 勉（東京学園高等学校 副校長）
山中 幸平（学校法人山中学園 理事長）
鈴木 秀一（一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長）
山崎 吉朗（一般財団法人日本私学教育研究所 専任研究員）

◆ 事務担当 ◆

川本 芳久（一般財団法人日本私学教育研究所 主幹）
田淵 輝夫（一般財団法人日本私学教育研究所 主査）

◆ 概 要 ◆

本部会は、諸外国の教育制度等を研究し、わが国の教育制度等との比較などから、「海外在住生徒教育」、「帰国生徒教育」、「外国人生徒教育」、「国際理解教育」等をいかに有機的に連携させるか、また、これらの私立学校の先導的な実践の積み重ねが、公教育全体の発展にどう寄与してきたかについて検証するとともに、国際社会において、グローバルな視野に立って主体的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを生徒に習得させるための教育について研究することを目的に平成22年度に設置された。

平成22年度から24年度の3年間にわたり、当部会では、急速に進展するグローバル化の中で世界基準の教育と日本の教育内容（質）について問題提起をしてきた。これを受け、本年度は、世界基準の教育現場を直に視察して、教育の質の向上を図るための研究を行うこととし、9月28日（土）～10月2日（水）、シンガポールのマンダリン・オーチャード・シンガポールを主会場に、募集人員30名に対し参加人員31名で実施した。

まず、開会式において、当研究所の吉田晋理事長（富士見丘中学高等学校理事長・校長）、本部会の企画・運営の責任者である大羽克弘国際教育研究専門委員長より、IB教育の先進国であるシンガポールで研修を行うことになった経緯、更に、その意義について説明が行われた。

初日のレクチャーでは、地元シンガポールで在留邦人の教育・進路指導などの事業を展開するワールドクリエイティブエデュケーショングループ・CEOの後藤敏夫氏から、シンガポールの教育の最新事情、シンガポールのIB教育の実態、今回の視察校の概要、今後の日本の教育の課題等について解説が行われた。

これを受け、2日目に、シンガポールでも屈指のIBワールドスクールであるTanglin Trust School（TTS）及びUnited World College of South East Asia（UWCSEA）East Campusの2校を、3日目にはAnglo-Chinese School Independent（ACS）を視察した。TTSは英国のカリキュラムが基本で、大学進学課程はA-LevelとIB Diploma Programの学校、生徒の約8割が英国籍である。UWCSEAは76の国籍、4,500名の生徒を要する大規模校で、大学進学課程はIB Diploma Program、IGCSEが中心である。ACSはアジア系の生徒が中心のメソジスト系キリスト教の学校で、大学進学課程はIB Diploma Programで、2012年度にIBの最終試験でフルスコア取得者の半数を占めたという全世界におけるIBトップ校である。

その他、在留邦人との交流を図る観点から、塾関係者及び企業関係者との懇談会も実施し、それぞれの業界が求める人材について意見を聞くとともに、わが国の私立学校への期待、要望・提言などを聞くことなどにより、グローバル化に対応した世界基準の教育を考える機会となった。

◆ 教育懇談会 ◆

本部会は9月28日より開催としているが、初日は、成田空港に集合し、チャンギ空港到着後、すぐにバスに乗り込み、教育懇談会会場である「Jumbo Seafood-The Riverwalk」に向かったため、教育懇談会が初めて参加者、及び関係者が一堂に会した場となった。そのため教育懇談会が参加された先生方の自己紹介の場となり、また各学校の情報交換も行われ、有意義なものとなった。



◆ 開 会 式 ◆

鈴木秀一事務局長の司会で開会し、吉田晋理事長、大羽克弘専門委員長の挨拶が行われた。

「理事長挨拶」

一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋

本部会は、5年前にスタートし、今まではまず、本来、我々が本当の意味で研究することは何かと考え、最初は国内でしっかりと基礎を積み、その後海外研修をということで開催してきたが、今年、本研究所の創立50周年を機に、現在グローバル教育が一番進んでいるシンガポールにて研修をということで開催に至った。さらに、現在、地球全体で物事を考え、捉える時代が来ており、日本では海外志向のない子ども達が増え、文部科学省、経済産業省等が、グローバル化の政策を打ち出しているが、大半が公立を中心とした政策であり、私学としてはそこに布石を打たなければいけないが、私学関係者の一人でも多くが、海外のグローバル教育の実際の現場をしっかりと見て、良い意味でこれからの日本の教育に資することができるようにしたい。

「研修会運営方針」

一般財団法人日本私学教育研究所 国際教育研究専門委員会委員長 大 羽 克 弘

日本に於いてもIBプログラムが導入されており、さらに今後導入する学校が増えていく可能性があり、今回視察を行うIBプログラムを取り入れた学校を見学することで、様々な問題、条件があり、導入は無理にしても、マインドだけでも学んで帰って欲しい。

◆ オリエンテーション（事前研修） ◆

オリエンテーション（事前研修）として、ワールドクリエイティブエデュケーショングループCEO・後藤敏夫氏のレクチャーが行われた。

●レクチャーの概要

シンガポールの教育事情

現在、日本では日本語版IBを導入する方向に動いているようであるが、IB教育はヨーロッパとアメリカでは違うし、シンガポールでのIB教育も一つの形になっている。

最初に、シンガポールの教育事情であるが、もともとはイギリスの植民地で、マラヤ連邦から分かれた。都市国家で資源がないため、教育政策が非常に重要である。その中でまずイギリス型の教育制度をエリート教育に的を絞って導入した。シンガポールではエリートは国を引っ張っていくという教育政策をはっきりさせている。また、この国は中国系（75%）マレー系（15%）、インド系（7%）とユーラシアン系の4グループ構成している。その中で英語を共通語にした二言語政策をとっている。民族文化と英語の文化を融合させており、外国人ビジネスエリートに永住権を与え、周辺文化を利用し、理解したコミュニケーション感覚を作っている。つまり、色々な人種・民族がいて、様々な宗教・文化がある中で様々な国の方の文化が知らず知らずのうちにわかってくる環境である。その中でシンガポール政府は国を教育ハブにしようと20年前から進めている。現在、シンガポールの大学のランキングがあがり、中学・高校へ周辺の国から生徒が入学している。教育のレベルが高く、英語での教育、そしてここから世界中の大学に行けるからである。



教育制度はヨーロッパ型の複線教育制度を導入している。つまり、エリート教育と職業教育に完全に分けた形である。GCSEという中等教育型で、その上にAレベルという教育がある。Aレベルは大学の準備課程で高校で大学の教養課程レベルを行い、その成績で大学を振り分ける。

小学校の最後でPSLEという国家試験があり、すべてのこどもが受け、ここで、エリート以外はノーマルコースに行き、N-LEVEL、O-LEVELの2回の試験を受ける。O-LEVEL後にジュニアカレッジに行き、A-LEVEL資格を取得し大学に行く。その他にPolytechnics（高等専門学校）があり、Associate degreeという準学院、短大卒の学位が得、就職あるいは大学に入り直す。一方エリートコースはGCE-A-LEVELとIBがあり、この中に特別独立校（Independent School）と統合プログラム校（MOE(シンガポール教育省)が管理）がある。特別独立校と統合プログラム校はO-LEVELを受けずに、A-LEVELの試験を受ける。あるいはIBを受けていく。これを国家が課程として認めている。つまり、最高にレベルの高いものをやるための大学進学のためのIBということになる。ローカルスクールとは別に、インターナショナルスクールが昨年の時点で23校あり、外国企業を誘致している。日本の企業も非常に増えている。理由は税金が安いことと、グローバル人材の確保である。現在政府がIBを非常に推奨している。理由はIBを入れて、優秀な学生をどんどん出すためである。つまり、教育のレベルが高いということ売りにする戦略である。さらにダイバシティーが重要とし、バイリンガル政策を進めている。

名門の私立校もIBをどんどん導入している。Anglo-Chinese校は世界有数のトップ校になっている。UWCも名門校の一つである。カナダ・イギリス系・オーストラリアのインターナショナルスクールもIBを導入しているところが増えている。理由は世界中の大学が認知しているからである。IBには途中から移り、最後にディプロマを入れる形が一般的な傾向である。US、カナダ、オーストラリア、全部複線型のカリキュラムを採用している。

以上のように、シンガポールはグローバルなカリキュラムが非常に組みやすい環境である。また、IBは様々な文化に対する科目構成ができる。英語、スペイン語、フランス語、教養としての文学とか思想の学習ができる。さらにmobility（移動性）の対応をしている。つまり何処へ行っても暮らせる、働ける。この能力がこれから非常に大事になってくる。

IBディプロマ

(IBディプロマのカリキュラムについての説明を行っていただいたが、ここについては、昨年の国際教育研究部会にて詳細な説明を後藤氏より行っていただいたので、省略する。)

日本でのIBディプロマ導入について

IBディプロマを取得すると、あるいはそれ以外のカリキュラムの取得でも、世界の大学では履修免除があるが、日本では全くない。苦勞してIBを所得し、メリット、アドバンテージがなければ世界の人たちは日本の大学には入ってこないということである。

日本にIBディプロマを入れることで、一番難しいことは、日本は土台がアメリカ型カリキュラムの「6・3・3・4」制であるが、ここにIBをどのように入れるのかという議論がなされていない現状がある。「6・3・3」制の中にそのまま入れる、単位を読み換える問題ではなく、実際に専門教育をどのように考えるのかということである。IBというのは大学進学準備課程であり、この課程の位置付けを入れないと、IBをやる意味がない。

もう一つ、PreIBの問題がある。ディプロマに入る前に教育をしないと成績は出ない。IBはスコアを出さないと意味がない。フルスコア（45点）、少なくとも40点台がそこそこ出るくらいのレベルまで持って行かないのであればIBを導入する必要はないということである。IBディプロマを考えているなら、PreIBの問題も考える必要がある。中高一貫教育を行っている私学は6年あるから可能である。高校3年間では厳しい。さらに英語の問題があり、そしてPreIB。

また、ディプロマの場合の科目揃えの問題。科目がないと生徒は将来が選べないのである。試験を受ければいいわけではない。科目を履修し、その科目でどの成績をとったということが、大学進学に重要になってくる。必要な科目の先生をどうやって確保するのも問題となる。だからSubjectをどう揃えるかが一番のポイントとなる。

文部科学省がどこまでやるかということも問題となるが、ディプロマを取得した生徒の大学入学のアドミッションをどうするかという問題、それと単位認定、ディプロマの少なくともHigherレベルのスコアに関して、単位認定をしないとおかしい。他の国はして日本だけしないということでは日本に優秀な学生は残らない。その問題をクリアしなければいけない。実際に大学の生徒に対する互換性、compatibilityが今問題になっている。例えばヨーロッパは、EUができ、ヨーロッパ中の大学の単位が全部互換ができる。アジアでも今ASEANの中である程度統一の方向性を考えている動きも出ている。一国別々という考え方がこれからは通用しなくなっていく状況が出てきている。

まとめ

グローバリゼーションがどんどん出てきている中、Mobility、世界中どこでも働けますという人たちをどうやって育てるかということが問題である。その意味でIBはその線上に乗っているということである。しかし一番大きい問題はIBを入れるということより、英語のカリキュラムをどうするかであり、まずそこを考える必要がある。

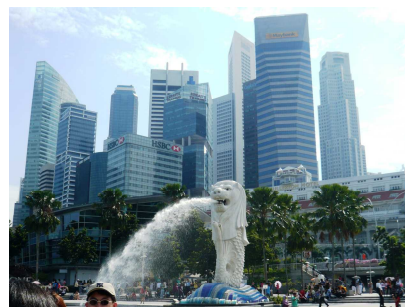
◆ 塾関係者との意見交換会 ◆

オリエンテーション後に、在留邦人との意見交換会が行われた。オリエンテーションでレクチャーを行っていただいた後藤敏夫氏の他に、現地で活躍している5名の方に参加をしていただいた。参加いただいた方は、早稲田アカデミー教育室長の桑田 穰氏、駿台シンガポール校校舎長の石原照夫氏、スプリング（シンガポールの教育に関するフリーペーパー）編集長の小倉純子氏とスタッフの五十嵐幸恵氏、ワールドクリエイティブエデュケーショングループオービットアカデミーセンター副代表の後藤節子氏である。昼食を兼ね、フリートーク形式で行われた。



◆ 市内視察 ◆

2日目の午後は、今回視察を行う学校がどのような環境に置かれているかを中心部を見ることによって事前に学ぶという目的で市内視察が行われた。



◆ Tanglin Trust School 視察 ◆

TTS (Tanglin Trust School) はもともとイギリス人学校であり、1925年に設立されたBritish Schoolである。以前は、イギリスのナショナルカリキュラムがあり、最後にA-LEVELがあったが、それをとらずに本国に帰っていたという学校であった。現在は、シンガポールにいと利点があるために、大学進学課程A-LEVELを行っている。その学校がIBのディプロマを入れ、優秀なスコアを出している。去年は45点（フルスコア）が1人、43から44点が5人出ている。IBコースの約3分の1の生徒のスコアが40点を超えている。生徒数は約2,500人で、70%強がイギ

リス人である。スタッフは190人で、補助教員が56人、職員が75人である。完全にイギリスのような感じの学校である。Year9（中2相当）までがイギリスのナショナルカリキュラムで、year10・11（中3・高1相当）にGCSEとIGCSEというものがある。IGCSEの「I」はインターナショナルである。国内のカリキュラムをインターナショナルにした形である。year12・13（高2・3相当）でA-LEVELとディプロマが選べるようになっている。



◆ United World College of South East Asia (UWCSEA) East Campus 視察 ◆



UWCSEA (United World College of South East Asia) はシンガポールの名門インターナショナルスクールの1つである。1971年に設立され、1975年からUWCに所属した。UWCというのは全世界にあり、簡単に言えば、国連が作ったような感じの学校である。この学校は最初からIBディプロマを行っているが、その下はMYPではなくて、IGCSEをやっている。Kindergarten（幼稚園・保育園相当）からGrade12（高3相当）まであり、Dover CampusとEast Campusの2つで約4,600人の生徒を抱えている非常に大きな学校である。スタッフは約380人の先生と約120人の職員である。また、非常に多くの国籍で、76の国籍の生徒が在籍しており、文字通りインターナショナルスクールである。従って、いろいろな宗教の生徒が在籍している。非常に成績の良い学校であるが、自律型というか放任というか、生徒は自主的に勉強をしている。管理型ではない。そしてIBディプロマに進む段階で成績が悪ければ、肩を叩かれて、違う進路を進められる。UN Nightという祭典があり、いろいろな国籍・民族の学校出身の生徒がいろいろなことを行っている素晴らしくインターナショナルな学校である。Grade8（中2相当）まではイギリス型のカリキュラムをやっているが、その後、IGCSEに入っていく。この学校にはGrade10（高1相当）にFoundationIBというものがある。GCSEというのは2年間のコースであり、2年同じ科目をとって、最終的にFinal試験があり、そこで成績が決まる。簡単に言えば、2年間試験勉強をしている状態である。そうではなく、途中からシンガポールに来て、UWCに入る生徒のために1年間の短縮コースがある。これがFoundationIBである。これはたいへん忙しく、1年間でIGCSEの全内容の7割を行わなければならない。ここで成績を取ることができればIBディプロマでも科目が取れるというハードルができていく。

今回の視察ではIB Co-ordinatorのGuy Roberts氏より概要の説明があり、その後施設見学が行われた。また、この学校に在籍している日本人生徒からUWCSEAの様子や、学んでいる感想等をうかがうことができた。

◆ 企業関係者との意見交換会 ◆

2日目に在留邦人との意見交換会ということで、塾関係者との意見効果会を行ったが、3日目にも、今度はシンガポールにおいて、企業等でご活躍されている方々と意見交換会を行った。参加いただいた方は2日目の意見交換会に参加いただいた後藤氏、小倉氏、五十嵐氏の他に、



PANASONIC Asia Pacific PteのDirector Member of Boardの松井幹雄氏、JETRO Singaporeの所長の長谷部雅也氏、同じく次長の石原賢一氏、UBS銀行のExecutive Directorの中島秀則氏、CLAIRE Singaporeの事務所長の足達雅英氏、同じく所長補佐の鈴木友美氏の9名である。本意見交換会も夕食を兼ねてフリースタイル形式で行われた。

◆ Anglo-Chinese School Independent 視察 ◆

最後の視察校となったが、当初のプログラムでは、Anglo-Chinese School (International) Singapore (ACS(International)) を予定していたが、当日、Anglo-Chinese School Independent (ACS) となり、世界一といっても過言ではないインターナショナルスクールを視察することができた。

Anglo-Chinese Schoolはローカルのインターナショナルスクールで、もともとJunior Collegeがあり、A-LEVEを行うJunior Collegeがあった。日本で言えば、旧制高校である。大学に進学する子供だけを集めた学校である。Junior Collegeには現在約1,900人の生徒が在籍している。Barker Roadの学校があり、Independentがあり、ここが今IBをやっている。Independent Schoolというのは特別独立校で、政府から援助を受けるけれども、教育の中身についてはMOE (シンガポール教育省) の管理を受けない学校である。また、Junior Primary、Primary、そしてInternationalがある。ローカルの学校がインターナショナルスクールをやっている。ここは強烈なHigh Scoreをどんどん出している学校で、IBのフルスコア45を昨年38人が出している。世界中でフルスコアは100人程度しか出ないのだが、この学校だけで38人出ている。これは驚異的な数字である。



設立は1886年で、非常に古い学校である。カリキュラムはIGCSE、それから、FoundationIGCSEという面白いコースがあり、これは短縮コースである。そして、IBディプロマを行っている。year1から6まで、12歳から18歳までの学校で、生徒が約750人、スタッフは約100人である。アジア系が中心で、華僑がメインである。最後の2年間でIBディプロマで、その前にIGCSEが2年間あり、その前が独立カリキュラム、これはイギリス型のカリキュラムである。

試験中のためIBクラスの見学は不可能であったが、Winston Hodge校長自ら学校の内容についてお話しいただき、また、施設見学にも同行され、解説いただいた。

◆ 総括 ◆

国際教育研究専門委員長 大羽 克 弘

グローバル化が進んでいく中、日本の教育全体が揺らいでおり、今後、ますます揺すぶられていくと思われるが、私立学校には建学の精神という基礎がある。その基礎をしっかりと支えながら、今後の展開を予測し、我々が何をやっていくべきかということをしつかりと考えていくことが重要である。

今回、教育的に様々な取り組みをし、進んでいるシンガポールを訪れて、IB認定校を視察し、

さらにシンガポール在住の方々の意見をお伺いし、今後の我々の学校教育へのヒントを得られたことであろうと思う。今後IBの導入の検討している学校、導入はなかなか難しいであろうと考えている学校、様々であると思うが、IBの学習者像の精神 (Inquirers、Knowledgeable、Thinkers、Communicators、Principled、Open-minded、Caring、Risk-takers、Balanced、Reflective) は素晴らしいものであり、今回の研修に参加された先生方は身をもって感じられたと思う。この精神を今後の学校教育に生かしていただければ幸いである。

◆ 参加者アンケートより (概要) ◆

研修会終了 (帰国) 後、参加された先生方にアンケートをお送りし、ご回答をいただいた。

教育懇談会 (初日夜) について

- 丸テーブルということもあり、初めてお会いする先生方ばかりでしたが、おいしい料理を囲みながら、親睦を深めることができた。
- 初対面の方ばかりでしたので、一部の方とお会いして、お知り合いになれましたのでとても良かった。
- 他校から来られた方とも話をしやすく打ち解けられた。
- 全体的な自己紹介、テーブル毎の座席表一覧があるともっと懇談が広くできたかなと感じた。
- ここでは同席した先生方との面識を広げる会であったので、オリエンテーションとして良かったと思う。
- 多くの先生方とご挨拶でき、貴重な場であった。
- 初対面の人が多かったので、全員自己紹介をした方が話しやすい雰囲気になったと思う。
- 主にテーブルを一緒に囲んだ先生方との交流に限られたが、その後の研修の意気込みを新たなものとするのに適した場所であった。
- 夕食を通じた懇談会という形式がリラックスして臨めるもので、懇談の会として良かった。
- 初対面の先生方との懇親は有意義。全日程を通して、全員の自己紹介の場がなく残念。

オリエンテーション (2日目午前) について

- このオリエンテーションでシンガポールの教育熱の高さと、日本のとの違いを明確にすることができた。
- シンガポールの現状を短い時間の中で濃密にご教授いただけたと思う。おかげでその後の研修で各学校の位置づけや見どころが明確になったと思う。
- 後藤氏による「シンガポールにおけるIB教育」は、シンガポールの教育事情、「優秀なエリートをきちんと育てる教育対策」「外国人がいる中で戦える人材作り」のお話しが特に印象に残った。また、学校視察の学校情報もとてもありがたかった。日本の今後の課題については、国が動かなければ、私学が突破口を開くしかないと感じた。しかし、その前に日本の大学制度の改革の中でIBを受け入れる体制が必要。吉田理事長の「何とかしたい」と言うお言葉に期待したい。
- シンガポールの教育の実態について、IBも交えながら大変分かりやすい内容だった。同時に日本の学校教育の問題点を改めて再確認させられました。
- IB教育、またシンガポールの教育について非常に分かりやすい説明であった。日本の教育とは全く異なることにとても驚いた。
- シンガポールにおける、IBの現状を詳細に説明していただき、大変有意義であった。各学校を訪問する事前知識として良かった。
- 現地の情報、教育事情が分かりとてもよかった。研修に入る前のよい企画であったと思う。
- 後藤氏のお話を聞き、自分が日々いかに狭い中で生きているのか、日本がいかに未来を共有せずに教育を展開しているのかに気づかされた。自分の学校の生徒の背中を押しながらも、自分の学校の経営、運営と

いう域を出て、グローバルな視野で教育を考えていかなければならないと考えさせられた。

- 後藤氏の話が分かりやすく、シンガポールの教育事情が良く分かったと同時に日本の問題点も考えさせられた。
- 後藤氏のレクチャーは、IBDPを理解する上で非常に役に立った。シンガポールの教育事情も併せて教えていただいたので、後日の学校視察にも大いに役立った。
- 刺激的なお話を聞くことができるとてもよかった。
- 後藤氏の「シンガポールにおけるIB教育」でシンガポールの先進的教育事情の実態が具体的に紹介され勉強になった。また、視察予定校についての紹介も役に立ち、視察が楽しみになった。また、「IBとは何か」という資料もよくできたもので勉強になった。
- 研修開始にあたり、内容が充実し有意義であった。参考になる事柄ばかりで時間が短く感じられた。

塾関係者との意見交換会（2日目昼）について

- オリエンテーションで感じた内容を更に詳しく確認できた。
- 席の関係で限られた方との会話に限られたが、オリエンテーションでは伺えなかった実情や生の声をより深く聞くことができた。
- まだ、参加の先生方の顔とお名前がわからないまま、塾関係者及び日本人学校保護者の方を紹介され、自由席のランチではまったくコミュニケーションが取れないまま時間が過ぎてしまった。
- 現地で直接、日本人生徒を指導しておられる方との話は大変興味深かった。
- あまり塾関係者の方と落ち着いてお話しをすることができなかつた。もう少し座った状態で話をできる形式だと良かった。
- 時間の関係で、あまり意見交換ができなかつたのが残念だった。
- テーブルにもよるかも知れないが、私の準備不足もあるが、現地にいる生徒保護者のニーズを知る以外にはあまり必要は感じられなかつた。
- 塾関係者が少なかつたため、話す機会が無かつたのが残念だった。少しの時間でいいから全体に話をしてもらいたかつた。
- 現地で生活する日本人の子どもやその親が日本の教育制度と大きく異なるシンガポールの学制に対し、どう考え、どう行動するのか、実情を語ってくれたことで、シンガポールの教育制度についてより身近なものとして感じる事ができた。

学校視察 i) Tanglin Trust School (3日目午前) について

- オリエンテーション等で事前に入手していた情報を裏付けることとなる第1番目の視察校だったので、いろいろ意識して視察させていただいたが、設備の充実度はさすがシンガポールという記憶がある。
- 校舎を含めて、施設設備が非常に綺麗だった記憶がある。教育内容としてはオリエンテーションで説明いただいた内容を理解するに非常に与しやすいモデルケースであったと思う。
- セキュリティが万全でお金持ちの学校というイメージ。生徒の質も良く、廊下では左側通行を1列で歩き列を乱す生徒もいない。生活指導で問題になる生徒はいない。問題があればすぐに退学と徹底したエリート教育。授業料は学年で違いがあり、日本円で160万円から300万円と日本と比較すると教育にお金がかかる国だ。音楽は48か国の生徒が混在しているためグローバルミュージックを扱うとのこと。世界中の子ども達が混在し、IBを柱にする必要性があると感じた。
- 素晴らしい施設と環境だった。もっとじっくり見たいところがあったが、限られた時間で様々なものが見ることができた。図書館が特に素晴らしい。
- 設備が非常に整っている学校だと感心した。運動やトレーニングをする施設や図書館などが、日本の教育

施設とは異なっていて、見ていてもとても刺激になった。

- どれか1校でもIBのDP課程の授業参観があるとよかった。事前のオリエンテーションで難しいと分かっていたが、何か一つでも授業の雰囲気伝わってくるものがあればと思う。
- 教育内容や施設は良く分かったが、生徒とコミュニケーション、授業見学ができず残念であった。お忙しい中、対応してくださり感謝したい。
- 施設、教育活動のどの面を見ても一貫した教育哲学が流れていることに心を打たれた。IBの学習者像10項目が動脈となって全ての活動に流れているのだと思う。素晴らしい。
- 生徒の表情が明るいのが印象的だった。他の学校も同様だが、生徒数の多さには驚く。
- IB認定校として最初に訪れた学校であり、インパクトは強い。学校の規模、施設の充実度、そして学費の件など、様々な新しい知見を得ることができた。
- 70%がイギリス国籍とあって、アングロサクソン系の生徒が多かったが、48の国籍の生徒が在籍しているようで、多文化社会の中で子ども達の自然な成長の在り方、生活の様子が実感できた。
- いずれの学校でも、手厚い対応をいただき感謝。見るもの聞くもの全てが参考になった。本校の国際化施策に多くのヒントをいただいた。いくつかは既に取り入れた。

学校視察 ii) United World College of South East Asia East Campus (3日目午後) について

- この学校はもっとも記憶に残っている学校で、特に日本人生徒の生の意見を聞くことができたことは特に印象深かった。彼らが日本の教育環境からシンガポールの教育システムへどのような気持ちで切り換えたのかなど、色々と苦労もあったと思うが、結果主義の状況の中で、伸び伸びと過ごしている姿は本当に印象に残っている。
- 今回の視察でより深くシンガポールのIB教育に対する私の理解度を高めてくれた学校である。特に実際に通う日本人の生徒たちの声が聞けたのがありがたかった。また、それと同時に彼らが日本語も英語も中途半端になりそう、という漠然とした不安を抱えている姿が印象的であった。彼らが今後どのような進路を目指すのかにもよるが、グローバルエリートとしての目覚めを促す意味でも、そういった不安を現時点で感じることができる環境は彼らのためには素晴らしいと感じた。(日本ではなかなかそういった気持ちを持って勉学に励むチャンスがないため)
- IBの教育を受け入れている日本人生徒6名のプレゼンがとてもよかった。聞きたいことをすべて取り入れてくれてありがたかった。新しくできた校舎でいろいろな工夫をされており、電気代・水道代のコスト削減のためソーラーシステムや構造上日陰を多く取り入れる設計等環境を考えた学校づくりで参考になった。
- キャンパスがアメリカの州立大学並で素晴らしかった。美術・芸術が充実している。日本人生徒の発表がとても参考になった。やる気のある生徒の話にはとても感心した。技術やスポーツの視察が整っていて素晴らしい。
- 多種多様な国籍の生徒が在籍していて、3校の中で一番Internationalな学校だと感じた。学校についてのプレゼンの後に、実際に通われている生徒さんの生の声を聞くことができたのもよかった。また、校舎内の掲示物や、飾り付けがとても工夫されていて、こういう学校だと生徒も通うのが楽しいだろうと感じた。
- 生徒の立場からのディスカスを聞くことができたのが良かった。
- 教育内容や施設はもちろん、在学生の話を聞くことができて良かった。ただ、その在學生への質問ができるとよかった。Tanglin Trust School同様、授業見学ができず残念であった。お忙しい中、対応してくださり感謝したい。
- 日本人生徒の頑張っている姿を拝見し、その保護者の教育観、教育への投資にただただ感心するばかりだ。日本の教育の「小ささ」を痛感した。
- 実際に通っている生徒の話を聞かないとその学校の実情は分からないので、日本人生徒の話を聞くことが

できたのは大いに参考になった。

- 主に芸術分野の設備を見学させていただいた。体育館が二分割され、IBDP専用のスペースが確保されていたのが驚きであった。
- UWC所属と言うことで、76の国籍の生徒が在籍ということで、Tanglin Trust School以上に多様な民族、人種の生徒が共存していた。その中で、日本人の生徒達も熱心に青春している様子を自ら語ってくれた姿には頼もしさを覚えた。施設も立派で、広い施設の中、生徒達が割と自由に、また自主的に活動している印象を持った。また低学年からICTを利用し、レベルの高いテーマに取り組んでいることも印象に残った。(小学校低学年から中学年くらいで高校レベル程度の「火山」の勉強など)

学校視察 iii) Anglo-Chinese School Independent (4日目午前) について

- 世界最高峰のこの学校では、結果にこだわることはもちろんのこと、人間性の教育にも独特の個性ある教育方法をとっておられるようで、参考になった。いずれの学校でも言えることだが、このシステムをそのまま現状の日本の教育システムにリンクすることは難しいことなのかもしれないが、この学校で最後に視聴したビデオの中の生徒たちの笑顔を見る限り、学力以上に何が求められているのかを垣間見たような気がした。
- IBフルスコア獲得者が世界一の実績を誇る同校。伝統と実績に基づいた校長先生の自信にあふれた立ち振る舞いに、果たすべきことを果たしているという潔さを感じる。日本ではなかなか認められる文化ではないが、結果がすべてという欧米的発想からいくと当然なのかとを感じる。外資系メーカーに籍をおいていた小生としてもこの発想は非常になじみやすいものがあつた。そしてその反面で、IBをどうこういう以前に日本そのものの教育システムがグローバル対応できるのかという不安が大きくなった。(何かを変えようとするたびに立ちはだかる壁が、まさしく既存の伝統であつたり枠組みであつたりするため)
- ネクタイをきちんとしている知的な品位のある生徒が多い。IB成績もトップクラス。運転手付きロールスロイスで送り迎えや、マンションを5つ持つ等、大金持ちが多いと聞くと、良い教育を受けられるのは一部の上位階層のようだ。その中で、価値観の重要性について指導が大切で、謙虚、誠実さ、他人への思いやり、勤勉さを重んじ、グローバル社会に貢献できる意志と力を育てる教育とSchool is a familyに感銘を受けた。
- 校長先生の話が大変役立つ話で、学校を運営する人の質で、その学校は変わるのだと感じた。IB以前に、学校の教育方針が確立されていると思った。TOKルームがあることには驚いた。素晴らしい。
- 校長先生の学校の教育方針に関するお話しがとても印象的だった。伝統があり、文武両道の学校だと思った。テスト期間中で、生徒の様子があまり見ることができなかつたのが少し残念です。
- 教育内容や施設は良く分かつたが、生徒とコミュニケーション、授業見学ができず残念であつた。お忙しい中、対応してくださり感謝したい。
- IBの学習者像よりキリスト教精神が強く浸透しており、それだけに一層深い、この上ない教育力を感じた。質の高い教育ほど人間のあるべき基本に忠実なのだと再認識させられた。
- 校長先生が理念を強調されていたのが印象的だった。またIBスコアで満点をとる生徒の多さに中国系のパワーを感じた。
- IBスコア満点をもっとも多く輩出している学校とのことで、どのような学校なのか期待が高かつた。だが、主に華僑系の子弟の学校でキャンパスの雰囲気は日本の学校と通じるものがあり、親近感が湧いた。
- 予定した学校以上にレベルが高い有名校で、事前にwebで調べた時にシンガポールを代表する学校として印象に残っていたので、見学できて嬉しかつた。実験室、工作室、プール、その他の施設の充実ぶり、校長の知識以上に人間教育に力を入れているという話、組織・人材の充実、生徒の様子、どれも素晴らしかつた。男子校と思つていたが、year5・6が共学となり、この年齢学年は男女比3:1ということで、女子を受け

入れているということを訪問して初めて知った。今後のこの学校の女子の成長に興味を覚えた。

企業関係者との意見交換会（3日日夜）について

- 間接的に関係のある企業の方々も多く、よい情報交換ができた。
- 現地進出企業の中核を担う方々との意見交換ということで、非常に有意義な時間が過ごせたように思う。グローバル化を目指したい日本が現行の教育システムを維持することはもう無理な話で、そういう観点からの日本版IB教育という発想がひとつの方法論として挙げられているものと理解しているが、それ自体が目的化しないことが肝要であると現場の方々からお言葉をいただく。日本で預かる子どもたちの未来をできる限り保障してあげることが我々に課せられた課題であると痛切に感じる。
- 丸テーブルで各テーブルに企業関係者が2名いて、とても有意義な懇親会であった。意見交換会は、ランチよりも少しお酒が入った方がざっくばらんなお話しが聞けて良い。
- 教育とは直接関わっていない現地の方との話は興味深かったです。
- どの企業の方も本当にお話しが上手で、とても有意義な時間を過ごすことができた。また、実際に子どもをIB校に通わせておられる保護者の方のお話もとても興味深いものだった。
- 国際的な動向を直に聞け、企業の方向性等、教育関係の研修では得られない情報等が現実の動きとして感じられて良かった。
- 現地情報、日本教育界への要望等を聞くことができ良かった。フリートークも良いが、テーマ等を決めて話し合うスタイルも良いのではないかと思った。
- 私が座ったテーブルにいたのは、パナソニックとJETROの人だったが、他の人たちから、もっと感想を聞けるとよかった。時間にもう少し余裕があるとよい。
- 現地の情報を聞くことができ有意義でした。
- 外資系（スイス）の銀行勤務の方から、シンガポール、スイス、日本との教育・文化・親としての考え方の違い等のお話をいただき勉強になった。また、世界の銀行のビジネスランキング一位と言われ、アジアの拠点都市としての地位を東京から奪いつつあると言われている勢いが金融部門でもあることがわかった。
- 一部の方とのみの懇談となり残念。

開催時期、参加費、宿泊施設等について

- 特に問題は感じませんでした。
- 開催時期については問題ないと感じた。参加費も妥当であったと思うし、オプションツアー等も初めての方にはよかったのではないか。
- 開催時期は、本校としては定期考査と文化祭のはざまで授業はなく学校説明会もなかったのでタイミング的に参加しやすい日程だった。参加費は、行程及びホテルのランクを考えるととても格安ツアーであると思う。宿泊施設は立地条件もよくとても快適だった。朝食も毎回おいしくいただいた。
- 費用も時間も適当であったと思う。ホテル、食事はとても良かった。
- 開催時期については、ちょうど中間考査の時期と重なっていたので、副担任にクラスのことをお願いして研修に参加することができた。1週間ずれていたら難しかったと思う。宿泊施設の内容を考えると参加費はとても抑えられていたと思うし、今回の研修に参加できたことに本当に感謝している。
- 開催時期の設定は、学校行事等の面からも参加しやすい時期で良かった。参加費、宿泊施設も非常に良く、安心して宿泊ができ、問題はなかった。
- 本校は2期生の学校なので、開催時期は適切であった。参加費、宿泊施設についても努力されたあとが伺え、本当に感謝している。教育視察なので授業見学ができるものと思っていたが全くできず、現地生徒との接触もほぼできなかったことは残念であった。私立学校の企画ではあるが、現地公立学校も含め、授業見学

ができるプログラムが欲しい。しかし、このような企画の計画・実施までにはかなりの準備・労力が必要であったと思う。実施して下さった先生方、職員の方には本当に感謝している。

- 神奈川から参加させていただいたが、かつて大変お世話になった都私学協会の先生方に改めて挨拶することができ大変貴重な場であった。後藤先生のレクチャー、3校の視察により、現在の日本という社会において、教育がどうあるべきなのか、私達が生きている間に何をしなければならないのか考えさせられた。
- 今回は学期中だったが、夏休みは無理だとしても、春休みあたりに実施してもらう方がよい。
- 開催時期については、多くの学校が文化祭、体育祭と重なってしまっており、実は本校でもかぶってしまっていた。恐らくどの時期に開催しても同様の問題は出て来てしまうと思うが、できることから、今後同様の研修を行う際、各種学校行事にかぶらない時期にさせていただけるとありがたい。参加費・宿泊施設は問題なし。
- 全て良かったと思う。日程も3日目、4日目は朝に余裕があり、シンガポールの朝の雰囲気もゆっくり味わえたのは予定外の収穫だった。
- 内容が充実しており大変満足。

その他ご意見ご感想

- 専門委員会の皆様のご尽力で、大変有意義な現地視察ができた。
- 一点だけお願いをさせていただくとすれば、2日目の午後が自分の裁量で動けるということが事前にわかっておれば、当方で予めアポイントをとって訪問することができたところもあったので、もし次回機会を頂けるのであれば企画書をご提示いただいた際にそのことも明記してほしい。
- 全国の先生方と懇親を深めることができよかったです。時間の都合もあったかと思いますが、どこかで参加者の紹介があるとよかったです。オプションも充実していて、あっという間の3泊5日だった。またこのような企画があれば、参加させていただきたい。
- 大変有意義でタイムリーな研修企画に感謝したい。
- このような貴重な機会をご提供くださり、また写真が入ったデータを送っていただき、本当に感謝している。
- 研修から一ヶ月余りが過ぎ去ってしまい、アンケートに記入するにしても、当時のことを思い出して書かなければならなかった。もう少し早い時期にアンケートを送っていただければ、もっと新鮮な感想をお送りすることができたと思う。
- 参加している先生方との交流の場（自己紹介など）があるとよかったです。塾関係者よりも、現地で生活している日本人保護者との交流の場（入試相談など）があると良いと思った。
- 良い体験をさせていただき感謝したい。シンガポールの良い学校は学費も高く、貧富の差は街中の様子も含めて感じた。いずれにしろ、驚くようなスピードで教育や人材集め、他の国家ビジョンに向かって邁進している元気な都市国家という印象を持った。また、グローバル化というものの具体的姿に触れ、日本の進むべき方向性を考えるヒントを豊富に持つ国であると同時に、多くの先生方からのご教示があり、役に立てたいと思う。
- 研究所の皆様のご配慮により、充実した4日間を過ごすことができた。その後、校内で研修の成果を発表する機会を何度か設け、全校職員で共有している。

◆ 都道府県別参加者数 ◆

都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数
北海道	2	石川	—	岡山	—
青森	—	福井	—	広島	1
岩手	—	山梨	—	山口	—
宮城	—	長野	—	徳島	—
秋田	—	岐阜	—	香川	—
山形	—	静岡	—	愛媛	—
福島	—	愛知	1	高知	—
新潟	—	三重	2	福岡	—
茨城	—	滋賀	—	佐賀	—
栃木	—	京都	1	長崎	—
群馬	—	大阪	1	熊本	—
埼玉	—	兵庫	—	大分	—
千葉	1	奈良	—	宮崎	—
神奈川	6	和歌山	—	鹿児島	2
東京	12	鳥取	2	沖縄	—
富山	—	島根	—	計	31